

東北応援ツアーレポート

参加コース A 福島県コース

氏名 横山孝夫

卒業年 1981年 卒業学部 産業社会学部

11月12・13日の2日間、3年ぶりに東北応援ツアーに参加、前回に続き福島県コースに参加した。長野県の公立高校の教員である私は、防災教育の立場から震災発生の翌年から岩手県宮古市田老、山田町、釜石市、陸前高田市、宮城県気仙沼市、南三陸町、石巻市、女川町、名取市閑上地区等の視察を毎年のように繰り返してきた。一方で、特別な理由があったわけではないが福島県内に行く機会に恵まれず、3年前の応援ツアー同様福島の様子を知りたく参加することになった。実は毎年応募しているが競争率が高く、3年ぶりに抽選に当たりこの機会を得た。

震災から5年半、過去10回ほど被災地を訪れて思うことは地域によって復興の状況に差があることである。原発の影響の中、避難指示が解除されつつある福島県内でも同様のことが言える。住民が戻り元の生活や街の姿に戻りつつある町村からそれがなかなか進まぬ処と。

晴れた秋の土曜の午後、本来なら人通りや車の列で賑わう街角の姿があるのに、交差点に立っても、四方の道路に車が走っていない、人一人いない光景を想像して欲しい。それが浪江町の現状である。時々、地元住民と思われる車や工事関係者の車が行き交ってはいたが・・・

12日(土)17:00からの勉強会での福島大学学長中井勝己氏の講演の冒頭に「被災地においてネガティブな話題は全国的なニュースになるが、頑張っている姿はニュースにならない」ということばがあった。さらに防災の観点から生徒に伝え、考えてほしいことがいくつかあった。①復興によって近代的な街になったが昔の面影がなく別の街に移り住むようになった神戸市長田区の例。②元の住民が戻ってくるような(戻って生活したくなるような)街づくりが必要なこと。③高齢者は帰還を希望しているが、若者は雇用の件、子供の教育、放射線量の不安などから戻らない(戻れない)こと。④放射線量の低い地元からかえって放射線量が高くても生活の便利さを求めて都市部に避難・移住すること。などである。

校友の皆さん特に若い人たちには一日も早く被災地の現状を知るために現地へ赴いて欲しいと思う。そして復興に向け頑張っている姿を自分の目に焼き付け、周囲の人たちに伝えていって欲しい。復興とは何かを改めて考えさせられた2日間であった。